

無藤 隆編

『テレビと子どもの発達』

(東京大学出版会刊 昭62・12)

犬養 健他 著

『父の映像』

(筑摩叢書 320 昭63・3)

大塚 雅彦

「テレビと子どもの発達」

テレビというメディア（媒体）はこんにち、われわれの日常生活と切り離せないものになっている。

NHKが一般向けテレビ放送を始めたのは昭和二十八年二月だから、それから約三十五年の歳月が流れている。ところで、子どもがテレビによってどんな影響を受けるかということは、早くからの問題であった。しかしテレビの、特に子どもに与える影響、その功罪について、ズバリと決論を出すことは実にむずかしい。無藤氏のこの本のすぐれているところは、むしろそれについて軽々しく断定することを避けていることだろう。そしてテレビのメリット、デメリットについて、実に慎重に幅広く多くの研究や議論を紹介している。つまり読者にそれを考えてもらうよう、素材を多く提供しているようでもあり、そこに学者としての配慮と良心が感じられる。編者はこの問題について研究を始めてから、ほぼ十年を経ているというが、その間に内外の多くの著書・論

文・報告書に接しているといい、本書の巻末にそれらが一括して掲げられている。それを数えてみたら実に二・四本もあり、私は一驚を喫した。今後この問題を論ずる者は、この老大な文献の幾つかに触れるだけでも参考になるだろう。

むろん編者は一応、結論めいたことも記さないわけではない。多くの研究で、テレビの影響の大きさはかなり小さいものであることが分かり、子どもに実際に接する人々の影響や、子どもの周りの環境諸々に比べれば、かなり小さく、そもそも子どもの発達において、単一の要因で大きな影響を一般に及ぼすものは極めて少ないものであり、要するに、テレビは、良くも悪しくも、子どもの生活と発達にとっての補助者に過ぎないものである、と言いながら、コミュニケーションのメディアとしての特質を、他のメディアと比較して、特に動的映像性・方向性・画一性・現時間（リアル・タイム）性の四つにおいて際だっている、とする。そしてテレビとのつき

合い方に就いて、①子どもの視聴時間を長くならないようにする、②悪い番組を見せない、③良い番組を見せる、④悪い番組を減らし、良い番組を増やす、⑤一緒に番組を見て、子どもとテレビをめぐって話す——等を提案している。

ここにち「テレビを家庭に置かない」という信念（？）の持ち主や、つむじ曲がりの少数の人は別として、本書の「あとがき」でもいうように「時代は決定的に動いてしまっており、後戻りは難しい」。それならばむしろ、テレビをどのように扱ったら子どもによい影響を与え得るか、或いは、どうしたらテレビの影響の悪い面から子どもを守るか等を、考えた方が賢明というものだろう。私は本書を読みながら、「月光仮面」「オバQ」「お母さんと一緒」等の子ども向け番組の歴史を思い出して懐旧の情に耽ったり、テレビの影響等について実にさまざまな研究実験が世界の各地で行われているのに驚いて、時の経つのを忘れたりした。本書はこの問題の研究

に関する最近の貴重な良書の一つといえよう。

「父の映像」

この本は実は新刊書ではない。もとは昭和十一年六月、東京日日・大阪毎日両新聞社から刊行されたもので、それが実に半世紀余を経て新訂版として復刊されたものである。しかし今読み返してみても、あまり古さを感じさせない。むしろ、なつかしさをこめて新たな感動を与えるだけでなく、影の薄い父親・存在感の乏しい父親が少なくない今日、父親というものの存在がもっとハッキリと意味を持っていた、よき時代の父子関係を思い起こさせ、それが、親と子というもののつながりの意義をあらためて再認識させる点がある。

本書のスタイルは、十二人のすぐれた父親（犬養毅・鳩山和夫・原敬・浜口雄幸・橋本雅邦・長与専斎・夏目漱石・児玉源太郎・小村寿太郎・浅野総一郎・渋沢栄一・森鷗外）が、子どもにとって（男の

子に限られているが）どう映ったかを十二人の子ども達に書かせたものである。つまり、子どもから見た父親のプロファイルというわけだ。十二人は政治家三人、実業家二人、文学者二人、軍人・外交官・医学者・法学者・画家各一名となっている。私の読後の感想からいうと漱石・鷗外のような文学者が最も面白かった。それは、私が政治家や実業家や軍人が嫌いである、という私の性癖とも関連があるのかもしれないが、書かれる対象になった人間の面白さや人柄に惹かれるのが文学者の場合、最も多いせいかもしれないし、また、書いた方の子どもの文章の上手さによる点もあるだろう。文学者というものが人間の弱さや哀しさを最も率直に現わしている、と思うのは、私のひいき目ばかりではないだろう。もっとも文学者以外でも、小村寿太郎・浜口雄幸・渋沢栄一・鳩山和夫等にも強く惹かれた点が少なくないのだから、一概には言えない。作家の城山三郎が本書の解説を書いているが、簡にして要を得ており、

これを読むだけでも、この頃の父子関係の良さがよくわかる。つまり、この本の出た頃（日中戦争の前年）は軍国主義が未だ色濃くなく、父や母がただ普通の父や母であったが、間もなく「軍国の父や母」となり、親達はまわりの気配をうかがいながら物を言う時代となり、親子の間ですら本音を言えなくなった。だから本書を読みながら、平和の大切さを噛みしめる思いもした、という。同感である。

子どもと散歩に出た父漱石がステッキで突如目茶

目茶に子を殴りつけたが、それが病気のせいだったと後年子どもは知ったことや、後妻を迎えた父鷗外が母とこの後妻との確執に苦しみ、妻が怒っている日は子どもに「当分家に来てはいけない」と諭した話などは、私に萩原朔太郎の「父は永遠に悲壮である」という語を思い出させる。翻って思う、私の子ども達は、凡人である私を、私の死後どう描くであろうか？

（白百合女子大学）

